

「13ツク」－マヤ人の世界観－

佐藤 孝裕

1、はじめに

古典期の低地南部マヤ社会では、長期暦と現在呼ばれている暦が用いられていた。これは、紀元前3114年8月11日を起点とする絶対暦であり^(註1)、この暦に基づく碑文が様々なモニュメントに刻まれているおかげで、われわれは主として当時の支配者にかかわる出来事についてかなり知ることができる。

しかし、古典期も後期に入ると、ユカタン北部ではこの暦は短期暦という名の簡略化された暦に徐々に取って替わられるようになった (Verásquez García 2010 : 59)。短期暦は、長期暦を構成する時間の単位の一つであるカトゥン K'atun が、必ず260日暦の20の日の一つアハウ Ajaw で終わるという性質を利用した暦である。アハウの係数は、13、11、9、7、5、3、1、12、10、8、6、4、2と二つずつ減り、13で一巡する。カトゥンは約19.7年に相当するので、短期暦は約256年を一周期とした暦と言える。

この13のカトゥンの循環という時間概念が植民地期にも存在したことは、16世紀にユカタンの司教であったディエゴ・デ・ランダ Diego de Landa が記した『ユカタン事物記』に掲載されている図からも窺える (図1)。

ところが、13という数字は時間概念にとどまらず、空間概念にも適用されていたようであり、しかもそれは古典期にまで遡りうる可能性がある。本稿では、マヤ人が持っていたこの「13区分」に基づく世界観について論じたい。

2、植民地における「13区分」

植民地期に筆写されたマヤ人の文書に『チラム・バラム Chilam Balam の書』がある。これは、ユカタン北部の各地で、スペイン人到来以降にアルファベットを使ってユカテク・マヤ Yukatek Maya 語で作成し保管された文書の総称で、ユカテク・マヤ人の歴史や神話、天文学、予言、儀礼、医術、文学等多彩な内容が記されている (El Libro de los Libros de Chilam Balam 1963 : 9 ; Libro de Chilam Balam 1985 : 12-13 ; Sharer 2006 : 123)。その一つである『カウァ Kaua のチラム・バラムの書』の10ページに、「カトゥンの輪」が記載されている (図2) (García 2010 : 60)。これは内部が四分割された四重の同心円の図であり、内から二番目の輪には13のカトゥンの係数と、スペイン語で王を意味する rey が記されている。その外側の輪には13の顔が描かれているが、二番目の輪に rey という単語が書かれていることと、アハウが260日暦の文字の一つであると同時に支配

註1 コウは9月8日を主張している。Coe and Stone 2005, p.45参照。

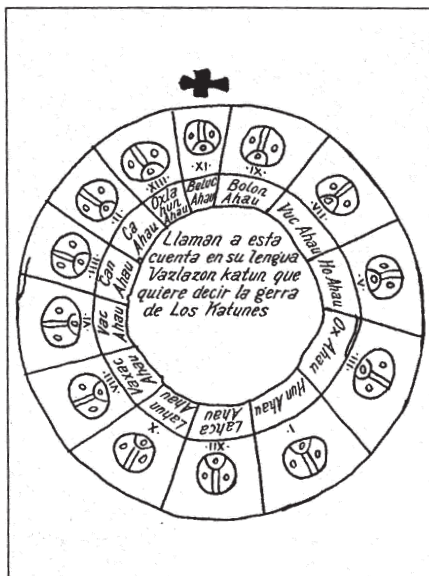


図1 『ユカタン事物記』記載の「カトゥンの輪」(Verásquez García 2010 6. を転載)

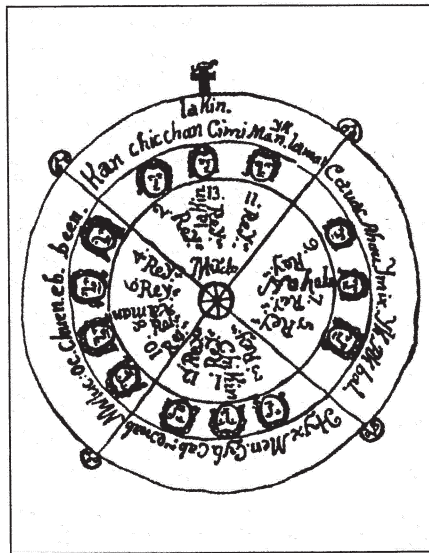


図2 『カウアのチラム・バラムの書』記載の「カトゥンの輪」(Verásquez García 2010 8. を転載)

者を意味する文字でもあることを考え合わせると、この顔は当時の小王国のアハウ、すなわちハラチ・ウィニク halach winik^(註2) を擬人化して表現したものであろう。一番外の輪には、アハウを含む260日暦の20の日の文字が並べられているのだが、4区画のうち上部の区画に東を意味するラキン lak' in という文字が記されている。13人のハラチ・ウィニクの顔が描かれ、更には方位を表す文字が付与されていることから、この図は単なる暦ではなく、地理的概念を含むものだと考えられる。

もう一つの例として、『チュマイエル Chumayel のチラム・バラムの書』の72ページに記載された「カトゥンの輪」が挙げられる(図3)(Verásquez García 2010: 60)。中心は空白だが、それに接する輪は13等分され、カトゥンの係数がアラビア数字で書かれている。続いて同じ数字がアルファベットを使ってマヤ語で書かれ、一番外側の欄には『カウアのチラム・バラムの書』同様、ハラチ・ウィニクと思われる人物の顔が描かれている。異なるのは、欄外の空間にマヤパン Mayapán やチチェン・イツァ Chichén Itzá を始めとするユカタン北部の都市の名称などが記されていることである。ここではカトゥンの循環という円環的時間概念が、空間に適用されていることがより明確に窺える。ただ注意しなければならないのは、この「カトゥンの輪」を説明している本文の内容が予言的なものであり、しかも言及される地名にはマヤパンなどの実在する場所だけでなく、スユア Zuyuá のような民族の神話的起源地も含まれていることである(El Libro de los Libros de Chilam Balam 1963: 54-55; Libro de Chilam Balam 1985: 136; López Austin y López Luján 1999, 2000)。従って、この図が当時の政治的な領域を忠実に反映しているとは限らない。

『チュマイエルのチラム・バラムの書』と同趣旨の図に、1688年に修道士ディエゴ・ロベス・コゴリュード Diego López Cogolludo が出版したマニ Maní の「カトゥンの輪」がある(図4)。この図は、先の二例と異なり全体が盾の形をしているのだが、中心にあるマヤの世界樹であるセイバの木を13人のハラチ・ウィニクの頭が取り囲んでいる(Verásquez García 2010: 62)。『チュマイエルのチラム・バラムの書』に見られたように、この13人のハラチ・ウィニクはユカタン北部の小王国の王を擬人化したものであろう。そして、セイバの木の存在は、この図が何らかの世界観の表現であることを示唆している。

3、先スペイン期における「13ツク」

13のカトゥンが循環する時間概念が空間にも適用された例を、植民地期に作成された文書から取り上げてきたが、その原型と見られるモニュメントはそれより早い後古典期にも存在する。それは、マヤパン、サンタ・リタ・コロサル Santa Rita Corozal 及びトゥルム Tulum で出土した、甲羅の縁に13のアハウの文字が刻まれている亀の石像である(図5)(Miller and Taube 1993: 175; Verásquez García 2010: 59)。スペイン人到来以前のマヤ人にとって、大地の形状は円形であり、亀の甲羅は大地の象徴であった(Taube 1988: 183-187; Miller and Taube 1993: 84; Stone and Zender 2011: 23・206-207)。また、甲羅が楕円形を成していることから、亀は「カトゥンの輪」

註2 後古典期後期にユカタン低地北部で競合していた小国家の支配者の称号。

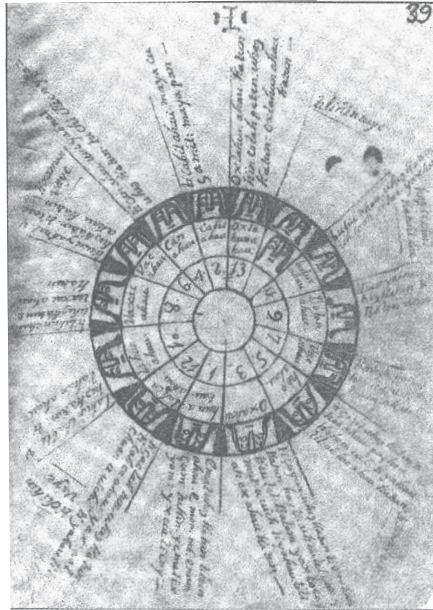


図3 『チュマイエルのチラム・バラムの書』 記載の「カトゥンの輪」(Verásquez García 2010 7. を転載)



図4 マニの「カトウンの輪」(Verásquez García 2010 12. を転載)

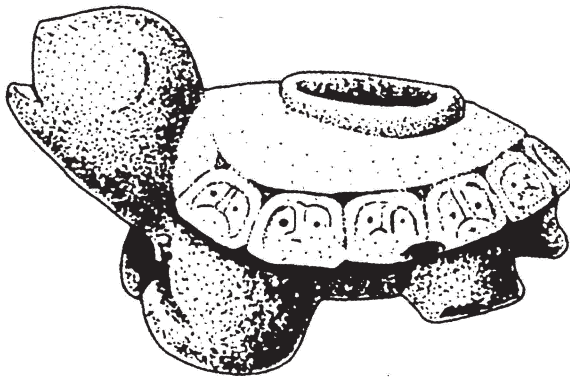


図5 マヤパン出土の亀の石像（Verásquez García 2010 5. を転載）

を表現する媒体としても用いられた。従って、これらの亀の石像は、当時のマヤ人の世界観を具現化したものと言える。

一方、地域を13区分する考えも植民地期以前に既に存在していたようである。このことを示すと思われるのが、カンパチエ南部のアルタル・デ・ロス・レジェス Altar de los Reyes の祭壇3に刻まれたテキストである。このモニュメントの上部はかなり磨滅しているのだが、玉座に座っている王らしき人物像の下部に

聖なる地、13の？ (k'uhul kab' uxlahuun ?)

という文字が確認できる(図6)。側面には、アハウ、玉座を表す文字、そして恐らくはチャタン・ウィニク Chatan Winik に続き、カラクムル Calakmul、パレンケ Palenque、ティカル Tikal、モトゥール・デ・サン・ホセ Motul de San José、エズナー Edzná など、上部のテキストを具体的に例示するように13の紋章文字が刻まれている(図7)(Grube 2003 : 34-37, 2004 : 122; Šprajc 2007 : 75; Tokovinine 2008 : 255-260, 2013 : 105)。これらの紋章文字を持つ国家は、パレンケとエズナーを除くといずれもベテン地方とその周辺に位置している。祭壇3には日付が残っていないが、類似した様式を持つ石碑1に、9.18.10.0.0(800年8月17日)の日付が刻まれているので、祭壇3のテキストは古典期後期から終末期にかけてのこの地域の人々にとっての何らかの世界観を反映していると考えられる。そして、アルタル・デ・ロス・レジェスの支配者にとって、このことをモニュメントに記して残すだけの重要性があったことは間違いない。

13ヶ国から成る領域に関する記録は、もう少し早い時期から存在する。それが「13ツク tzuk」である。このことから、アルタル・デ・ロス・レジェスの祭壇3の上面テキストの13の後に続く磨滅して判読できない文字は、「ツク」だったのではないかと推測されている(Tokovinine 2008 : 255)。つまり、元々は「聖なる地、13ツク」と刻まれていたというのである。では、「13ツク」とは何であろうか。

植民地期の Chol'orti 語、Chontal 語、Yucatec 語などのマヤ諸語では、ツクは何かの部分や区分の意味であり、何か大きなものの一部を指す時に使用される言葉であった(Tokovinine 2013 : 98-99)。また、この語は単独で地域名称として使われることはなく、特定の個人を指す際に用いられた。従って、「13ツク」と呼ばれた人は、13区分される大領域のある特定の一区域に属す人物であることを意味した。

「13ツク」の最古の生起例は、Dos Pilas Dos Pilas の碑文である。たとえば、碑銘の階段4の第3段の一節で、672年にDos Pilas王Bajlah Chan K'awiilを破ったティカル王ヌーン・ウホル・チャーク Nuun Ujol Chaak について、

彼がそれを行った、ティカルのヌーン・ウホル・チャーク、13ツク

と言及している(Beliaev 2000 : 66; Tokovinine 2013 : 102)。また、碑銘の階段2の第3段に、679年にヌーン・ウホル・チャークに復讐したことが記されているのだが、その一節に

彼は捕えられた、13ツクの長



図6 アルタル・デ・ロス・レジェス祭壇3の上部（Grube 2003 Figure 1. を転載）

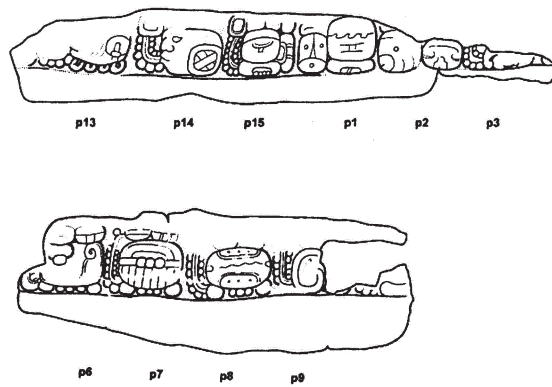


図7 アルタル・デ・ロス・レジェス祭壇3の側面 (Grube 2003 Figure 2. を転載)

とある。

ティカル王家の人間を「13ツク」の称号で言及している事例は、ナランホ Naranjo にも見られる。石碑30には、王カフク・ティリウ・チャン・チャーク K'ahk' Tiliw Chan Chaakが 714年11月19日にティカルのアフ・カロム Ah Kalom と放血儀礼を行ったことが記されているのだが、この人物を「13ツク」と呼んでいる（Beliaev 2000 : 66 ; Tokovinine 2013 : 104）。

ここで興味深いのは、「13ツク」と呼ばれているのはヌーン・ウホル・チャークなどドス・ピラスに敵対するティカルなどの勢力に属する人々であって、バフラフ・チャン・カウィールには決してこの称号は用いられていないことである（Tokovinine 2013 : 102）。逆に、ドス・ピラスの碑文で「13ツク」の称号で言及されているヌーン・ウホル・チャークが王として支配しているティカルの碑文でも、「13ツク」の称号は全く生起しない（Beliaev 2000 : 67）。換言すれば、ヌーン・ウホル・チャークにとって「13ツク」は他称であって、自称では決して使っていないということである。

「13ツク」の称号を伴うのは、必ずしもティカル王朝の成員だけではない。たとえば、ドス・ピラスの石碑9では、バフラフ・チャン・カウィール王の捕虜として描かれたヌーン・バフラム Nuun Bahlam という人物が「13ツク」と呼ばれているが、彼はティカル王朝とは無関係のようである（Guenter 2003 : 40-41 ; Tokovinine 2013 : 103-104）。

以上は、「13ツク」称号を他国の人物に言及する際に用いている例だが、自国の王を「13ツク」と呼んでいる例もある。ラ・オンラデス La Honradez の石碑1には、正面に刻まれた人物の肖像の説明として

ヤシュ・ワク Yax Wak'、…神聖なラ・オンラデス王、13ツク
と記している（Beliaev 2000 : 67）。石碑4にも

彼がそれを行った、カク…チャン・キニチ・ヤシュ・ワク K'ak' …Chan K'inich Yax
Wak'、神聖なラ・オンラデス王、13ツク

という碑文が刻まれている。

シュルトウン Xultun の石碑5でも、王の正式な称号である「トク・ウィツ Tok' wits の王、土地の支配者、カブテ K'abte の神聖なヨキン yok'in」の後に、「13（ツク）」が続いている（Beliaev 2000 : 67）。

また、リオ・アスル Rio Azul と関連があると見られる地名フシュ・ハーブ・テ Hux Haab Te' の諸王が製作した土器のテキストでも、彼らは「13ツク」と自称している（Tokovinine 2013 : 17-18・104）。

以上のことから、「13ツク」はティカルから北方、シュルトウン、ラ・オンラデス、リオ・アスルにかかわる地域名称であろうと推測できる。ただし、先述したようにティカル王は決してこの称号を用いず、敵対する国からこの称号で呼ばれているだけである。それとは対照的に、その他の国々では、王は自ら「13ツク」を名乗っている。そして、更にその北に位置するのが、アルタル・デ・ロス・レジェスなのである。

では、アルタル・デ・ロス・レジェスの祭壇3は、「13ツク」の世界観を明示したモニュメントであろうか。祭壇3に13の国々の紋章文字が刻まれていることと、「13ツク」の字義を考え合わせると、その可能性が高いことは確かである。ただ問題なのは、祭壇3のテキストに生じた紋章文字の国と、現在判明している「13ツク」を構成していると思われる国の中で、重なるのはティカルのみだということである。祭壇3が示す世界観と、ドス・ピラスやナランホの碑文に生起する「13ツク」の領域は別個のものとも考えることもできるし、両者の間に100年以上の開きがあるので、「13ツク」の時間的推移の結果とも考えることもできる。

4、「13ツク」と「カトゥンの輪」

では、植民地期の「カトゥンの輪」に見られる空間の13区分は、征服以前のマヤ人の世界観を継承したものであろうか。両者にはどのような共通点があり、また相違点があるものであろうか。

共通点としては、両者とも「13」という数字に基づいていたということが挙げられる。しかし、共通するのはこれくらいで、それ以外の点では大きく異なっている。

第一に、「カトゥンの輪」が約20年ごとに中心となる都市が移動し、256年で一回りするというように循環的歴史観を明示しているのに対し、「13区分」に時間的観念は一切認められない。第二に、「カトゥンの輪」では、13ある各カトゥンの係数は全て異っているが、巡回する各カトゥンの中心都市にはマヤパンなど重複するものがあり、13の異なった中心都市が存在するわけではない。それに対し、「13区分」の場合、アルタル・デ・ロス・レジェスの祭壇3が「13区分」を具現化したモニュメントであると仮定すると、実際に13の異なった国家から成っていた可能性が高い。第三に、「カトゥンの輪」がユカタン北部低地を舞台としているのに対し、「13ツク」の舞台はユカタン南部低地のペテン地方周辺が中心である。

このように、「13ツク」が示す世界観と後世の「カトゥンの輪」に見られる世界観とでは、違いが目立つようである。しかし、「13ツク」が刻まれた低地南部の古典期社会が滅亡する過程で、少なからぬ人々が危機から逃れるために低地北部に移住し、結果的に古典期末期から後古典期の繁栄をもたらす一因になったことが指摘されているので(Sharer 2006: 525)、それと共に「13ツク」の概念が伝わったことは考えられる。ただ、時間が推移するうちに、「13ツク」の意味が変移したのであろう。古典期と後古典期とでは、建築や芸術などの様式が一見して大きく異なるのを見れば、それも当然であろうと思われる。

5、おわりに — 「13」の意味 —

植民地期に筆写された様々な「カトゥンの輪」と、古典期の碑文史料に生起する「13ツク」を題材にして、マヤ人には本来13という数字に基づく世界観が存在した可能性を指摘してきた。

では、なぜ「13ツク(区分)」だったのであろうか。それは、マヤ人にとって「13」という数字が、時間的にも空間的にも重要な概念だったからかも知れない。まず、時間概念の上での「13」に

ついて述べると、「はじめに」で指摘したように、マヤ人が使っていた短期暦は13のカトゥンが循環する期間を一つの周期とする暦であった。すなわち、マヤ人にとって「13」は時間概念の上で重要な数字だったのである。しかも、「13ツク」の最古の生起例であるドス・ピラスの碑文が刻まれたのは672年以降であるが（Tokovinine 2013 : 102）、これはユカタン北部で長期暦が短期暦に取って替わられるようになる633年以降と時間的に近接している（Verásquez García 2010 : 59）。しかも、古典期前期に既に短期暦が知られていた地域と、「13ツク」が碑文に生起する地域はほぼ重なっている（Verásquez García 2010 : 59 2.）。このことから、「13」という数観念を重視していた地域で、それを空間的にも適用するようになったと推測することができる。空間的観点から見ると、マヤ人の宇宙論では天界は13層に分かれていて、それぞれの層にその世界を治める神がいると考えられていた（Miller and Taube 1993 : 154; Sharer 2006 : 730）。このように、時間的にも空間的にも「13」という概念が重要だったことから、「13ツク」という領域観念が生まれたのかも知れない。

ただ、「13ツク」が持つ世界観を理解するには、「13ツク」に該当する地域や「13」という数観念だけを考察の対象にするだけでは困難である。と言うのも、マヤ人の世界観には、「13」という数的概念だけではなく「7」「28」「6」等様々な数に基づいて分割される領域観の存在が知られているからである。とりわけ「7ツク」は、「13ツク」と同時代の、しかも同一のテキストに生起している（図8）。従って、これら複数の世界観を比較考察することによって初めて、「13世界」という世界観が持つ真の意味が解明されるであろう。今後は、これら複数の領域概念を比較することによって、それらが持つ意味を解明することを研究の課題としたい。

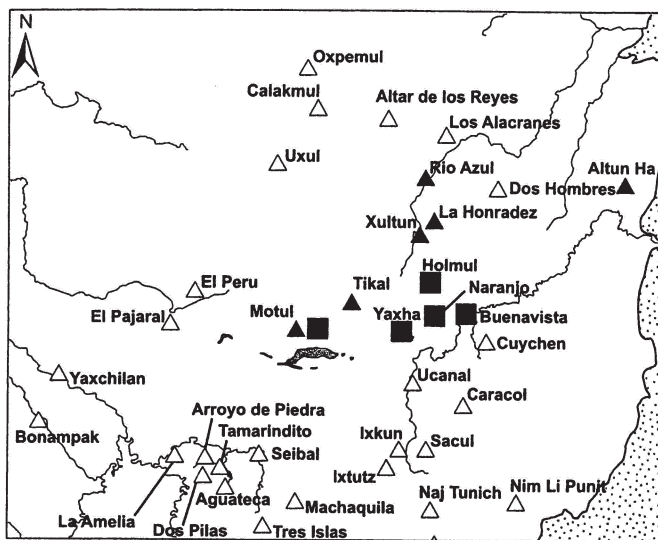


図8 「13ツク」に属す都市 (▲) と「7ツク」に属す都市 (■) の分布図
(Tokovinine 2013 Figure 53. を一部改変)

引用文献

Beliaev, Dimitri D.

2000 Wuk Tsuk and Oxlahun Tsuk : Naranjo and Tikal in the Late Classic. In *The Sacred and the Profane : Architecture and Identity in the Maya Lowlands*, edited by Pierre Robert Colas, pp. 63-81. A. Saurwein, Markt Schwaben.

Coe, Michael D. and Mark Van Stone

2005 *Reading the Maya Glyphs, Second Edition*. Thames and Hudson Ltd, London.

Grube, Nikolai

2003 Archaeological Reconnaissance in Southeastern Campeche, Mexico : 2002 Field Season Report, Appendix 2 : Epigraphic Analysis of Altar de los Reyes, pp 34-37.

Foundation for the Advancement of Mesoamerican Studies, Inc., Los Angeles. www.famsi.org/reports/01014/

2004 El origen de la dinastía Kaan. En *Los Cautivos de Dzibanché*, editado por Enrique Nalda, pp. 117-131. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D.F.

Guenter, Stanley Paul

2003 The Inscriptions of Dos Pilas Associated with B'ajlaj Chan K'awiil. Mesoweb: www.mesoweb.com/features/guenter/DosPilas.html.

López Austin, Alfredo y Leonardo López Luján

1999 *Mito y realidad de Zuyúá : Serpiente Empulmada y las transformaciones mesoamericanas del Clásico al Posclásico*. Fondo de Cultura Económica, México, D.F.

2000 The Myth and Reality of Zuyúá : The Feathered Serpent and Mesoamerican Transformations from the Classic to the Postclassic. In *Mesoamerica's Classic Heritage : From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by David Carrasco, Lindsay Jones, and Scott Sessions, pp.21-84. University Press of Colorado, Boulder.

Miller, Mary and Karl Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson Ltd., London.

Sharer, Robert J.

2006 *The Ancient Maya, Sixth Edition*. Stanford University Press, Stanford.

Šprajc, Ivan

2007 Exploraciones recientes en el sureste de Campeche. *Arqueología Mexicana*, vol. XV, num. 86, pp. 74-80.

Stone, Andrea and Marc Zender

2011 *Reading the Maya Art : A Hieroglyphic Guide to Ancient Maya Painting and Sculpture*. Thames

and Hudson Ltd., London.

Taube, Karl A.

1988 Prehistoric Maya Katun Wheel. *Journal of Anthropological Research*, vol. 44, num. 2, pp.183-203.

Tokovinine, Alexandre Andreevich

2008 *The Power of Place : Political Landscape and Identity in Classic Maya Inscriptions, Imagery, and Architecture*. Ph.D. thesis, Department of Anthropology, Harvard University, Cambridge.

2013 *Place and Identity in Classic Maya Narratives*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Verásquez García, Erik

2010 El antiguo futuro del k'atun Historia y profesía en un espacio circular. *Arqueología Mexicana*, vol. XVII, num. 103, pp. 58-63.

1963 *El Libro de los Libros de Chilam Balam. Segunda Edición*, traducido por Alfredo Barrera Vásquez y Silvia Rendón, Fondo de Cultura Económica, México, D.F.

1985 *Libro de Chilam Balam*, traducido por Antonio Mediz Bolio. Dirección General de Publicaciones y Medios de la Secretaría de Educación Pública, México, D.F.